

# NEWSLETTER

会長と幹事長が交代いたしました。新会長に関西大学外国語教育学研究科の吉田信介先生を、新幹事長には神道美映子氏をお迎えしました。旧会長の西川先生、旧幹事長の田尻さん、お疲れさまでした。



## 新会長 挨拶 関西大学 外国語教育学研究科 吉田信介先生

このたび西川和男教授から伝統ある関西大学外国語教育学会の会長職を引き継がせていただきました吉田信介でございます。微力ながら会長職として全力を尽くしてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本学会は2004年に、外国語教育学研究科の発展と会員相互の親睦および学術の向上・発展を図ることを目的に、研究科教員と院生によって創設されました。2014年9月24日現在、教員28名、現役院生52名、修了生136名で構成されています。これまでは同窓会的色合いが比較的強い会でしたが、最近では、外国語教育学研究科関係者だけでなく、学内外の外国語教育に関心のある方々にも門戸を広げ、語種に囚われず広く外国語教育について研究・議論するユニークな学会として活動しております。

さて、この機会に、研究者として第一歩を歩み出された方、既に長年教育現場において教育実践に勤しんでおられる方、研究者として既に一家をなされておられる方を前に、はなはだ初歩的なことで恐縮ですが、最近、大先輩の言葉から改めて考えさせられたことをこの場を借りて紹介させていただき、就任の挨拶に代えさせていただきます。

かつて、その明晰暢達な文章で知られる社会学者の清水幾太郎氏は、今でも広く読まれている『論文の書き方(1959初版)』の中で「論文やリポートは、なかなか書けないものである。もとより“いかに考えるべきか”を離れて“いかに書くか”は存在しえない。」と述べ、「文章(論文)を書く」ということについて次のように述べています。少々長くなりますが引用させていただきます。

…「文章(論文)には、攻める面と守る面とがある。文章(論文)を書く時、私たちは攻撃と守備という二つの活動をするのである。言うまでもなく、攻撃というのは、自分の意見や発見を主張する側面である。これは自分だけが社会に向って行うものであり、自分だけが行うものであればこそ、文章を書くという張り合いがある。そして、この側面では、自分の観念が文章として大爆発を遂げるためには事前の小爆発が起らぬように注意しなければならない。これに対して、守備というのは自分の意見や発見が、学説の上と現実の上とで、社会的に孤立しないように、そこにしっかりと足場を固める作業である。これが不足だと、社会に向って歩み出して行く自信が生まれて来ない。攻める方が個人性の面であるとすれば、守る方は社会性の面である。この面においては、友人と話し合うことも、書物で確かめることも必要である。しかし、叙述そのものでは、この面は背景に退いて、文字にならぬことが多い。場合によって、一つの論文における攻める面と守る面との比重はそれぞれ異なるであろう。攻撃が主で、守備が従のこともあり、また、それと反対のこともある。しかし、二つの側面があることは念頭に置かねばならぬ。文章(論文)を書く時、自分は何処を攻めているのか。何処に自分の意見や発見があるのか。それを知っていなければいけない。というのは、うっかりすると、ただ守るばかりで、一向に攻めない文章を書いてしまうからである。…(pp.135~6)」(下線部は筆者による) (2 ページに続く)

(1 ページ続き)半世紀以上も前の清水氏によるこの鋭い指摘は、今日の研究者にとってもかけがえない教訓といえます。私自身の場合、論文執筆中は、ここで指摘されている攻める面と守る面の両者のバランスを保てるような状態にありません。この氏の指摘に触れて、そもそも自分は攻めるために論文を書いているのか、守るためか、あるいはどちらでもないのかについて改めて考える必要があることに気づかされました。まさに目から鱗とはこのことでした。

最近、大変残念なことに、日本の科学界を根幹から揺るがす問題が発生し、研究というものについて改めて深く考えさせられる機会がありました。おそらく今回の問題の背景には、研究において熾烈な競争があり、あまりに攻める面が意識され過ぎたために、守る面が少し疎かになってしまったことがあると感じるのは私一人ではないのではないのでしょうか。

関西大学のマスコットキャラクターが「ふくろう」であることはあまり知られていないかと存じますが、そこには深い意味が込められています。「ふくろう」は、ギリシア神話で知恵、芸術、戦略を司る女神アテナーの使者であり、知の象徴とされています。そこで、関大生たちに、この鳥にあやかって「学生生活の中で自分を見つめ直し、物事を自らの目と耳で感じ取り、創造力を育んでほしい」という願いから、「大きな目と耳(羽角)を持つこの鳥に喩えた」とされています。

会長として、これから皆さんとともに、攻守ともにバランスを取りつつ、「ふくろう」のように物事を自らの目と耳で感じ取りながら、千里山の空を羽ばくことができれば、この上ない喜びです。

最後になりましたが、神道幹事長をはじめとする幹事会、役員会の皆様と一致団結して、本学会を盛り立ててまいりますので、何とぞよろしくお願い申し上げます。

はなはだ簡単ではございますが、会長就任の挨拶とさせていただきます。

## 新幹事長 挨拶 神道 美映子



この度、幹事長を引き継がせていただくことになりました神道美映子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私は本研究科で、第一期生として中国語教育学について学ばせていただき、現在、関西大学他、四つの大学で中国語を教えております。教員歴はすでに20年を超えましたが、実は、大学院進学前は、小・中学校で中国帰国生およびニューカマーの子供たちの日本語教育に携わっておりました。その後、さらに国語科・中国語科の教員として高等学校での勤務を経て、現在に至っております。

大学での教え子は毎年約300名を数えますが、一部の留学生を除けば、学生の母語は日本語か中国語に限られます。一方、日本語教育の現場では、中国、タイ、フィリピン、ブラジル、ペルー、チリ、ボリビア、ベトナム、韓国、そしてアフガニスタンと、実にさまざまな国籍の生徒たちとの出会いがありました。振り返れば、いろいろな言語が飛び交い、異なる文化がぶつかり合う中で、当時、私が彼らに教えたことよりも、彼らから教えられたことの方がはるかに大きかったと思います。そして、この頃の経験が、今も、教育者としての私の原動力になっています。

彼らから学んだことのひとつが、「教育をつなげる」ことの必要性です。小学校から中学校へ、高等学校から大学へ、各教科間で、各学校間で、そして日本から世界の学校へ…。タテにもヨコにもつながっていくことで、教育の可能性は無限に広がります。また、相互の交流は、確実に「1+1=2」以上の化学反応を起こすのです。(3 ページに続く)

(2 ページから続く) 関西大学外国語教育学会は、まさにそれを可能にする場です。学会活動では、各方面の第一線で活躍しておられる先生方をお招きして、学校種や専門言語を問わず、実践・研究に役立つ外国語教育についての貴重なお話を伺ったり、活発な意見交換を行ったりする機会の提供を目指しております。折しも、オープンエデュケーション時代と呼ばれ、教育が大きな変革期にある今、本学会が果たす役割は決して小さなものではありません。常に「新時代の外国語教育」のあり方を見据え、発信していきよう、新会長の吉田信介先生をはじめ、役員の方々のサポート役として、微力ながら尽力して参りたいと存じます。今後、学会活動を通して、ひとりでも多くの会員の方々とお目にかかれることを楽しみにしております。

現役院生のみなさん！もしキャンパスで私を見かけたら、どうぞ気軽に声をかけてください。「Circolo」のケーキセットでもつつきながら、ぜひ、これからの外国語教育について語り合しましょう。

最後になりましたが、8年間の長きにわたり、幹事長として本学会を支えてくださった田尻利恵子さん、本当にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

2013年度研究大会が3月9日(日)に行われました。吉田先生による基調講演、関西大学学部生の樋口氏、関西大学の氷野先生、大阪府立大学の清原先生による発表、その後発表者4名を交えてのパネルディスカッションが行われました。パネルディスカッションではフロアからも活発な発言が飛び交いました。

## 第9回研究大会報告 研究委員長(2013年度) 神道美映子

去る3月9日(日)、岩崎記念館において関西大学外国語教育学会第8回研究大会が開催されました。今回は「新時代の外国語教育—ICTの可能性—」を大会テーマとし、小学校から大学までの現職教員の方々に多数ご参加いただき、成功裏に幕を閉じました。ご参加くださいました皆さまに心よりお礼申し上げます。

基調講演には、吉田信介先生(関西大学教授)をお迎えし、「ICTを活用した英語教育・国際理解教育」と題してお話いただきました。「教育工学」「授業研究」「教材論」「国際交流」という4つの観点から、ICTの理論と実践について、実に盛りだくさんで濃密なご講演をいただきました。なんと45ページにも及ぶハンドアウトをすべて網羅したご講演は、興味の尽きないテーマばかりで、あっという間に時間が過ぎました。参加者の皆さんも、きっと「もっともっとお聴きたい」と思われたことでしょう。吉田先生、貴重なお話を本当にありがとうございました。

また、パネルディスカッションでは、清原文代先生(大阪府立大学)、氷野善寛先生(関西大学アジア文化研究センター)、樋口拓弥氏(関西大学学部生)が、外国語教育に役立つICT情報を、その使用法も含めて、丁寧にご紹介くださいました。スマートフォンやタブレット持参の参加者は、その場で操作してアプリを試すことができたので、フロアからも活発に質問が出されました。

なお、清原先生がご提供くださった発表の補充資料は、先生のHPにアップロードされています。さまざまな教育支援アプリが紹介されていますので(QRコード付)、大会にご参加いただけなかった方も、ぜひ一度アクセスしてみてください。

大会終了後も、和気藹々とした雰囲気の中で、ご発表くださった方々を囲んでの質問や歓談が続き、ICT教育への関心の高さがうかがえました。専門言語や学校種を超えての学会交流で、有意義な時間を共有できたことを嬉しく思います。

最後になりましたが、大会運営にお力添えくださいました西川先生をはじめ、役員の方々に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

## 発表1

## 「教員向け授業支援 iPad/iPhone アプリ “Yubiquitous Text” の開発」

発表者: 樋口拓哉(関西大学学部生)

発表者の樋口氏は関西大学学部生の4回生であるが、教育者の立場として iPad や iPhone で使える “Yubiquitous Text” というアプリを開発した。いわゆるデジタルネイティブ世代であり、小学校の高学年からインターネットがあり、中学校で受けた英語の授業では CD や DVD といったメディア教材を積極的に活用して勉強してきた世代である。さらに、大学に入学した 2010 年に iPad が発売され、タブレット端末を活用した教育が小学校から大学まで増え始めた。

本発表で樋口氏は、教育側(研究者側)の視点と IT 側(開発者側)の両方の視点から自身が開発したアプリ、Yubiquitous Text の有用性について報告した。Yubiquitous の名称は、「いつでも、どこでも」といった利便性を表す “Ubiquitous” という言葉と、スクリプトにタップするときに「指」を使うので、“Yubi” という言葉を合成した樋口氏の造語である。樋口氏自身はまだ学生であるため、教育者側と開発者側だけでなく、さらに使用者目線で使いやすいアプリの開発を心掛けた。開発者と使用者の距離が遠くなるのを避けるため、自身が一人でアプリの開発を勉強し開発した。2013年10月に外国語教育メディア学会関西支部 2013 年秋季研究大会において最初の Yubiquitous Text を発表し、公開・配布を行っている。2014年1月には最新バージョン、2.0.1 が公開され、教育の現場で使用した教員や学生からのフィードバックをもとに改善され続けている。

教育用アプリは開発者から押し付け的に使用を促されて、教育現場で使用している感が強いが、樋口氏の開発した Yubiquitous Text は、使用者としての立場を尊重しているため、ユーザーの立場でアプリの改善をしていることが大変印象に残った。開発者としてはやはり多くの人たちに使ってもらいたいという気持ちがあると思う。しかし、使用者に使い勝手の良くないアプリは、導入はしても使用し続けることが少なくなる。汎用性が低く、コストの高いアプリを導入するよりは、低コストで使用者目線で開発されたアプリを現場で使用する人々がこれから増えてくるだろう。

今後、iPad や iPhone を教育現場で使用することはますます増えてくると思われるので、使用者目線で開発した Yubiquitous Text のさらなる進化と、実践報告が増えることを期待する。(文責: 船越 貴美)



樋口 拓哉氏



氷野 善寛氏



清原 文代氏

## 発表2

### 「中国語教育資料のデータベース化の試み」

発表者: 氷野 善寛(関西大学アジア文化研究センター)

中国語教育の分野においては、英語教育や日本語教育に比べて、まだまだ教育法や教材開発に遅れが見える。現状に鑑み、氷野先生は誰もが自由に使える補助教材や素材のデータベース化、学習コンテンツの開発を積極的に推進されていらっしゃる。例えばこれまでも、本学アジア文化研究センターにおいて「CSAC Digital Archives」の設計、図書館貴重書のデジタル化、また、明治期から昭和初期の中国教材のデジタル化およびデータベースの構築などを手掛けるほか、中国語学習サイト「CH-TEXT's」の運営、中国語会話 Podcast「Chinese Station」、iTunes U を利用した中国語関連講義の配信など、ICT を活用した中国語教育活動を展開しておられる。

今後さらに、中国語教育・学習に関する教材や情報のデータベース化を進め、構築したデータベースを、公の教育機関や民間の教育機関、あるいは個人を問わず、自由に、無料で利用できる共有サイトとして公開される予定とのことである。具体的には、授業で使用できる写真やイラスト、レリア、音声(mp3形式)、ワークシート(PDF、JPEG、DOC形式)、動画等を蓄積今後さらに、中国語教育・学習に関する教材や情報のデータベース化を進め、構築したデータベースを、公の教育機関や民間の教育機関、あるいは個人を問わず、自由に、無料で利用し、WEB 学習、iTunes U、Podcast 等の番組紹介や、中国語教育に関する情報(学会および研究会や資格試験など)を提供するサイトを設計中である。また、このサイトでは、登録ユーザーは様々なファイルをアップロードできるようにし、利用者はユーザー登録を不要にして、教材や情報の共有が広く進められるようにするそうである。正式運用は2015年からの予定とのことであるが、中国語教育に携わる者としては、利用できる日が待ち遠しいかぎりである。(文責:神道 美映子)

## 発表3

### 「教員のためのスマートフォン&タブレット活用術:

TTS・音声入力・板書動画・電子書籍」

発表者: 清原 文代(大阪府立大学高等教育推進機構)

「2014年2月に内閣府が発表した『平成25年度青少年のインターネット利用環境実態調査・調査結果』によれば、高校生の97%が携帯電話を所有し、そのうち8割がスマートフォンであるという。近年学校単位あるいは自治体単位でタブレットを教育現場に導入するケースが多いが、教える側が提供する機器が全国に普及するよりも、学習者自身が所有する機器の普及の方が速いのではないかと」というお考えのもと、清原先生は、本発表で外国語教員に役立つスマートフォンアプリおよびタブレット用のアプリを数々紹介くださった。先生の発表を伺って、特に「教育用」と銘打ったものでなくても、工夫次第で、いくらでも外国語教育に応用できるアプリがあることに気づいた。

TTS(テキスト音声合成)や音声入力の利用の仕方、「反転授業」に役立つ板書動画のiPadを用いた作成方法についての丁寧な解説に加え、EPUB(電子書籍)教材の作成方法にも言及された。

なお、当日配布いただいた補充資料(予稿とは別のも)は、以下にアップロードされており、資料には主にアプリの名称とQRコードが掲載されている。

[http://www.las.osakafu-u.ac.jp/~kiyohara/EPUB/2013/kufler-s\\_2014-03-09.pdf](http://www.las.osakafu-u.ac.jp/~kiyohara/EPUB/2013/kufler-s_2014-03-09.pdf)

このPDFにはWebページやアプリへのリンクが張られていて、リンクをクリックするとアクセスしてもよいかと尋ねられるが、これは正常な動作なので、ぜひ一度アクセスして試していただきたい。専門言語を問わず、授業に役立つアプリが満載である。(文責:神道 美映子)

## 基調講演「ICT を活用した英語教育・国際理解教育再考」

講師: 吉田 信介(関西大学)

「人間はなぜ ICT を使うようになったのか」を大きなテーマに、ICT を活用した英語教育と国際理解教育の2つの教育活動について具体的な例を交えて講演をしてくださった。まず、先に技術が発達して人間は後から道具の使い方を探るようになったために、ICT の技術開発とユーザーの特性を考慮する作業が抜け落ちて、人間が ICT を使うことにストレスを感じていると指摘された。実際、若者たちは ICT を使うことに抵抗感が少ないが、高齢になるにつれて ICT を使う頻度が減少してくる。吉田先生は、教育の中に ICT が入り込み、体の一部となっている人たちのことをデジタルネイティブと呼んでいらした。現代の若者たちの行動パターンに目をやると、人との待ち合わせやレポートの提出等、携帯電話やメール、SNS が普及したおかげで、待ち合わせの方法やレポートの提出方法が変わったと、技術によって人間の行動とコミュニケーションの形態が変わってきたことを強調しておられた。

次に、ICT が教育に入り込んできたことで単に知識を記憶するだけでなく、今まで以上に情報収集力と問題解決能力が必要となり、OECD が進めている PISA (Program for International Student Assessment) と呼ばれる国際的な学習到達度に関する調査でも、デジタル読解力を測定していることに言及された。Big Data という言葉がキーワードとなっている昨今、いかに必要な情報を収集し、発見し、問題を解決していくかが現代人に求められる能力となっており、そのため、ICT が人間の思考を変え、同時にコミュニケーションの方法をも変えたことを指摘しておられた。

講演のメインは ICT を活用した英語教育と国際理解教育である。英語教育においては ICT を使った授業研究や教材作成、タブレットを使った授業や反転授業等、最新の情報を提供してくださった。また、国際理解教育においては、吉田先生が関わっていらっしゃるパプアニューギニアでのプロジェクトの例を紹介された。先生のお話から、遠隔地とのオンラインでの交流はグループ作業が難しいこと、そして、対面交流と遠隔交流の両方の交流の長所と短所を把握したうえで、双方の誤解を最小限に抑えることが国際交流を継続するための秘訣であることがわかった。学習者に国際社会で生きる力をつけるために、我々教師は、ICT を上手に活用して、対面交流と遠隔交流の両方を使って国際理解教育に取り組むことが必要だと言えよう。

最後に、「メディアは人間の行動を変える」ことに再び言及され、ICT に振り回されることなく、デジタルネイティブ世代の教育に取り組むべきことを力強く強調された。(文責: 船越 貴美)



ディスカッション「ICTを活用した英語教育・国際理解教育再考」  
パネリスト:吉田 信介(関西大学)、樋口 拓弥(関西大学外国語学部)、  
氷野 善寛(関西大学アジア文化研究センター)、  
清原 文代(大阪府立大学高等教育推進機構)  
司会:近藤 睦美

大会最後に、今回の研究大会で発表された方々をパネリストに迎え、参加者全員によるディスカッションが行われた。

最初に、司会の近藤氏がパネリスト同士で質問がないかと促した。吉田信介先生が口火を切り、樋口氏に対して授業のどのような場面で開発したソフトウェアを使うのかを質問された。樋口氏は自分自身が受けてきた教育、つまり、一斉授業での英語教育が土台になっているので、そのスタイルを踏襲しているとのことだった。

次に吉田先生が氷野氏に中国語のデータベースを構築しているが、中国では著作権はどのように扱われているかを質問された。氷野氏は難しい問題であると断ったうえで、どのような時に著作権に触れ、どのような時に著作権に触れないのかを分けて説明して下さった。続けて、吉田先生は清原氏に対して、発表で文章を節や句で切って縦に並べていく(カスケード)音読練習に使えるソフトウェアを紹介していたが、このソフトウェアはディスレクシア(失読症)の学習者に対してのみ有効であるのか、第2言語学習者に対してでも有効であるのかを尋ねられた。清原氏の答えは、中国語は文字が音を表さないのので、文字の数だけ音を覚える必要があり、母語話者でも音だけ流されると聞き取れないことがあるということであった。そして、文字と音を一致させるためにカスケードのソフトウェアは外国語学習者にも有用であると説明された。

パネリスト同士の質疑応答が終わった後で、フロアからの質問を受けた。フロアからは4人の参加者がパネリスト全員に同じ質問をしたり、ピンポイントで質問に答えてもらいたいパネリストを名指ししたりして質疑応答がなされた。いずれもすぐに現場で使える質問ばかりで、活発なやり取りが見られた。

(文責:船越 貴美)



## 「研究会 2014」開催報告 研究大会委員長(2013年度) 神道 美映子

去る6月28日(土)、岩崎記念館において「関西大学外国語教育学会研究会 2014」を開催いたしました。毎年6月に開催されるこの「研究会」は、外部の方を多くお迎えする「研究大会」とは趣を異にし、主に研究科内部の方々を対象として、現役院生はもちろん、修了生の方々にも「研究とは何か」ということを今一度考えていただき、今後の研究活動のヒントを得ていただくための内容を企画しております。研究科の先生によるご講演は、日頃、授業では知ることのできない、先生方のご研究にまつわる本音を聴かせていただけるもので、毎回、大変興味深いお話が伺えます。

今回は、今井裕之先生(関西大学教授)をお迎えし、『コミュニケーション活動』の研究アプローチと題してご講演いただきました。ご講演は「研究とは?」「コミュニケーションとは?」「言語とは?」といった今井先生からの問いかけに、参加者同士がディスカッションしながら答えを探っていくというスタイルで進められました。

「教室でのコミュニケーション活動が、単に外国語を学ぶための活動になってはいないか」「コミュニケーション活動には『情意』が存在しなければならないのではないか」との問いかけには、私自身も外国語教員の一人として深く考えさせられました。今回、フロアで和気藹々と意見を出し合ったことに関して、今後、それぞれの職場で、研究室で、どんどん意見交換していただければと思います。

また、この春の修了生の佐藤祐里子さんには、教材作成と論文執筆の体験談をお話いただきました。論文作成スケジュールや対象言語での執筆における注意点などの具体的なアドバイスの他、失敗談も含めてのご経験、そして「おまけ」のお話は、現役院生の皆さんにとって大変貴重な情報になったと思います。コーヒープレイクには、佐藤さんが工夫を凝らして作成された視聴覚教材(英語)もご披露いただきました。

お忙しい中、豊富な資料をご準備いただき、ご講演くださいました今井先生、個性的な楽しいスライドで体験談をお話してくださいました佐藤さん、どうもありがとうございました。

なお、今年度より、研究大会委員長を修了生の阿部慎太郎さんにバトンタッチさせていただくことになりました。年明けには、一層充実した「第9回研究大会」および「研究会 2015」を企画していただけることと存じます。皆さま、次回もどうぞ奮ってご参加ください。



## 講演『授業研究と実践開発のあいだ： 「コミュニケーション活動」の研究アプローチ』 講師：今井 裕之（関西大学教授）

今井教授は、「よりよい授業者・指導者になりたい」との思いから、さまざまある外国語教育研究の中でも、「授業を良くするための研究」をこれまで実践してこられた。本講演では、そのお立場から、まず、研究と実践の「あいだ」というポジションの確認をされたうえで、実践寄りの研究の中で取り扱われてきた「コミュニケーション言語活動」について触れられ、教室における言語活動の意義や気を付けるべき点の説明をされた。その際、先生が投げかけられた「‘language’と‘communication’、tool(道具、手段)はどちら？」という問いに対して、フロアではさまざまな気づきが起こった様子であった。その後、小学校での英語活動の事例を基に、コミュニケーション活動における社会文化的アプローチや、「感情」が果たす役割について触れられ、そして、最後に‘language’も‘communication’も、両方とも手段であると同時に目標とする結果でもあるから、手段と結果を切り分けず、ANDで結ぶことが必要であると結ばれた。加えて、これからのコミュニケーション活動に関する研究には、従来の外国語教育研究とは違った視点を持つこと、つまり発想の転換が重要であると今後の研究の方向性についても言及された。フロアからは、「今井教授と同じテーマを持ちながら、どのように研究にアプローチするか悩んでいたが、今回の講演から貴重な示唆が得られた」といったコメントが出されるなど、これから研究を進めていくM生にとっても、すでに研究や実践を多くおこなっている修了生にとっても学びの多い講演であった。(文責：近藤 睦美)

## 「教材作成を振り返って」 発表者：佐藤 祐里子

2年間の大学院生活で課題研究に取り組まれた佐藤会員に、ご自身の取り組みをご紹介いただいた。

その中で、研究への興味を深めるために「入学時から興味やアイデアを積極的に集める姿勢を切にし、授業だけでなく、市販されている教材の分析、学会への参加、普段の生活の中で思いついたアイデアをノートに書き留める」等、ご自身が行ってこられた取り組みについて紹介くださった。

教材作成においては、「作成にあたって重要な点として、まず、自分の論理を整理するために文章にまとめ、思考を可視化する作業を繰り返すこと、そして、ゼミの仲間や指導教員からフィードバックを得て、論理的な背景を持った教材を作成すること、加えて実際に作成した教材にニーズがあるかどうか、作成した教材が実際に活用できるかどうかをしっかりと念頭において作成することを挙げられた。

佐藤会員には今回の発表を通じて、他にも多くの情報をご紹介いただいた。それらは課題研究を志す参加者にとって非常に有益なものであると感じた。(文責：中垣 優子)



## 学会からのお知らせ その1

2014年度の研究大会の日程が決まりました。詳細は後日学会メーリングリストとWEBでお知らせします。

日時:2015年3月7日(土) 13:00~16:00(予定)

基調講演:静哲人先生(大東文化大学)、正頭英和先生(立命館小学校)

タイトル:英語授業の心・技・愛

## 学会からのお知らせ その2

6月28日の研究会の後、旧会長の西川先生と旧幹事長の田尻さんに新旧交代式が行われました。西川先生は3年間、田尻さんは8年間にわたってそれぞれ会長、幹事長を務められました。新会長の神道さんから花束を贈られて、労をねぎらいました。お二人とも本当にお疲れさまでした。



## 学会からのお知らせ その3

6月28日の総会で、以下のメンバーが新役員として承認されました。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

役職	役員		
名誉会長	齋藤 栄二 教授		
会長	吉田 信介 教授		
総務委員会	*近藤 睦美		
財務委員会	*名部井 敏代 教授	森元 靖	
研究大会委員会	*阿部 慎太郎	竹田 里香	田中 絵理佳
広報通信委員会	*船越 貴美	戎 妙子	
紀要委員会	*山中 由香		
監査	山崎 直樹 教授	沈 国威 教授	
幹事長	神道 美映子		

### <編集後記>

大変遅くなりましたが、ようやく第9号を皆様のお手元にお届けすることができました。今回はお知らせする内容が濃く、いつもより4ページも増幅しています。記事をお寄せくださった会員の皆様、ありがとうございました。2015年が会員の皆様にとって良い年になりますように。(YF)